

不登校経験のある高校生のレジリエンス育成と学校適応の質的研究

— 通信制K高校パフォーマンスコースに焦点づけて —

A qualitative research paper on the development of psychological resilience and adjustment to the school environment, of high school students who were classified as school non-attendeess

— A case study of the performing arts programme at K high school; a school with flexible learning options catering to students who were once school non-attendeess —

環太平洋大学附属国際科学・教育研究所
大橋 節子
OHASHI, Setsuko
International Institute for Science
and Education

埼玉純真短期大学こども学科
金子恵美子
KANEKO, Emiko
Saitama Junshin College
Childhood Education Course

キーワード：パフォーマンス活動, レジリエンス, 不登校, 学校適応

Abstract : Students' non-attendance at school in Japan has been a serious educational issue. So far, in the past fifty years of research on school 'non-attendance' a solution has yet to be found. In recent years, the factors which cause non-attendance have become increasingly diversified and complex. Truancy and dropout at the post-compulsory level, namely at senior high schools, has become a social pathology. A correlation between social withdrawal and missing school is suspected. This research project aims to identify the reasons behind school absenteeism and to discuss practical approaches toward students' adjustment to school settings. The objective of this qualitative, longitudinal study is to discuss the effects of performing arts programs on students who were once school non-attendeess. Performing arts programs explore physical activities that influence the development of students' psychological resilience (the ability to cope with stress and recover) helping them adjust to their school environment. A case study of the performing arts program at K high school in Tokyo which offers flexible learning options catering to students who were once school non-attendeess will address the issue of school non-attendance.

I. 問題

高等学校（以下、高校という）への進学率は、1974年度（通信制課程を除く）には90%を超え、約40年後の2013年度に98.4%と、高校全入の時代となっている（文部科学省、2014）。その一方で、1990年には高校中退者が12万人に達し、これを受けて文部省は各都道府県教育長・知事等に対し、中途退学予防について取り組みへの徹底を指示した（文部省、1993）。2013年には、高校中退は53,869人となり、高校在籍全生徒数の1.6%と減少傾向にあるものの、学年別では高校1年生が23,320人とその約4割を占めている。さらに同

年、不登校生徒数は56,292人となり、高校在籍全生徒数の1.68%と増加傾向にある（内閣府、2013）。

文部科学省（2003）による「今後の不登校への対応の在り方（報告）」では、不登校の要因あるいは背景について「要因・背景の多様化・複雑化」が示されており、その特定が容易でないことを報告している。これまでの研究から不登校の原因は、①学校原因論、②家庭原因論、③本人原因論の3つに分類され、近年では状態態そのものの多様化・複合化が問題となっている（伊藤、2009）。特に、思春期における不登校は、不登校状態に加えて身体症状、不安、焦燥感、強迫症状、家庭内暴力、摂食障害、ひきこもりなどの諸現象

をとまなうものが多く、状態像の把握が複雑化している（内閣府，2007）。

さらに高校進学後の不登校・中退は、ニート、その後のひきこもり、フリーターなど深刻な社会的問題の端緒であると考えられ（内閣府，2011）、高校における不登校予防・回復、中退防止は、若者の社会的自立につながる対応策として喫緊な課題である。

このような時代的背景を踏まえ、不登校の発現・再発や中退への不安を抱えた生徒の受け入れ先として、定時制・通信制・単位制高校の役割が期待される場所である（全国高等学校定時制通信制振興会，2012）。近年は、定時制・通信制高校において、他の高校を中途退学した転入学・編入学者や小・中学校で不登校経験があり学校適応に不安を抱える者など、様々な入学動機や学習歴を持つ入学者が増加しており、彼らの自立支援が定時制・通信制高校の役割として大きく期待されている（文部科学省，2013）。

1. 学校不適応への取り組み

近年では、高校における中退発生のプロセスを明確にするべく調査も進んでおり、高校生活において、生徒が充実感を得られる場や機会の設定が重要だとされている（国立教育政策研究所，2013）。

また、不登校を心の問題にとどめず、一つの身体の病態として扱うべきであるとの考え方から、睡眠を基本に身体の正常化に取り組むもの（三池，2009）を始め、子どもの不定愁訴を、不登校由来の怠け症状と判断せず、医師の診察と治療の対象とするもの（田中，2009）など、不登校の身体症状へのアプローチの重要性も、医療領域の分野では示されている。

2. レジリエンスと不登校

ネガティブな人生経験やストレスフルな環境において、適応を保つ者も不適応になる者もいるという精神疾患の防御機能における個人差を、Rutter（1985）はレジリエンスという概念を用いて初めて説明した。また、Flach（1997）は、レジリエンスを、ストレスによって心理的にネガティブになっても新しい生き方を発見し自己を立て直す内面的力であり、変化とその克服を繰り返してレジリエンスが強化、成長するとした。

このような、レジリエンスにおける定義がなされて以後、多くの研究が積み重ねられている。その一つとして、小塩・中谷・金子・長峰（2002）は、レジリエンスを“困難な状況で苦痛を感じながらも、それを乗

り越え精神的病理を示さず、良い適応を示す心理的特性”と定義し【精神的回復力尺度】を作成した。分析の結果、①新たな出来事に興味や関心をもち、さまざまなことにチャレンジしていこうとする【新奇性追求】、②自分の感情をうまく制御することができる【感情調整】、③明るくポジティブな未来を予想し、将来に向けて努力しようとする【肯定的な未来志向】の3つの下位因子で構成されることを明らかにした。また小塩（2011）は、レジリエンスを困難な局面や悲惨な状況に置かれてもしなやかに回復する過程の概念だとし、心の柔軟さをもたらす精神的回復力とは「折れない心」だと述べた。またレジリエンスの特性として、小塩・中谷・金子・長峰（2002）は、レジリエンスが高い者は、音楽、絵画、ダンスなど多様な物事に興味や関心を持ち、新たな活動を行う傾向にあることを示唆した。これらの研究成果を踏まえると、身体活動や表現活動を通してレジリエンスを向上させることが不登校からの回復と何らかの関連を持つことが期待される。

そこで本研究では、様々な活動の中でも特に身体の活動に焦点を当て、これらの活動が新たな取り組みへのチャレンジや、感情のコントロール、また将来に向けて努力するなど、不登校回復に向けたレジリエンスを育成し、結果として学校適応へとつながる可能性について検討することを目的とする。

3. 通信制K高校におけるパフォーマンス活動の取り組み

K高校は1992年に創立され、その指導キャンパスは、36都道府県65か所、在籍生徒数11,929名（内全日型通学生徒は8,868名/2014年11月現在）の通信制高校である。小・中学校において不登校経験のある生徒が半数程度在籍しており、生徒それぞれの状態に合わせて集団や個別による授業の設定がある。K高校の特徴は、通信制でありながら、「登校」を基本にした「全日型通学方式」で、不登校経験のある生徒に対応した不登校回復過程へのアプローチを行っている。中でも、パフォーマンスコースは、演劇活動を中心としたコースであり、劇場を使った本格的な公演、地域の行事への参加、学校・施設訪問のボランティアなど様々なパフォーマンス活動を行っている。教員は、プロの俳優や舞台演出の経験者で、専用スタジオにおいて、ダンス・芝居¹⁾・インプロ²⁾・歌・ラップ・殺陣³⁾の指導をおこなっている。

またこのK高校を対象とした学校適応に関する調査

では「望み通りの学校に出会えた」や「学校生活を通して自信がついた」などパフォーマンスコースに所属する生徒において、学校適応が高いことが示されている（伊藤，2012）。

II. 本研究の目的

これまで見てきたように、不登校経験者の学校適応を促す取り組みとして、医療の立場から身体活動の重要性が主張され、また、不登校経験者が多く在籍するK高校のパフォーマンスコースの生徒において、学校適応が進んでいることが示されている（伊藤，2012）。よって、本研究では、K高校のパフォーマンスコースにおける、身体活動をとり入れた「パフォーマンス活動」が、不登校回復過程へのアプローチとしてどのように学校適応に繋がるのか、インタビュー方式による質的調査と質問紙による調査を縦断的におこないレジリエンス（精神的回復力）に着目して、その関連を検討する。具体的には、パフォーマンスコースの生徒に対して行った3回のインタビュー調査の2事例を基に分析し、さらに質問紙調査の結果を用いてパフォーマンス活動とレジリエンス（精神的回復力）との関連と学校適応について検討した。なお、学校適応についての指標は、不登校経験のある生徒が学校に登校した出席日数から出席率を算出し、学校適応の指標にして検証するものとする。

III. 研究1

1. インタビュー方法

調査対象：通信制K高校パフォーマンスコース不登校経験ありの2名A（男子1名）、B（女子1名）で、3回連続でインタビューを受けた生徒2名を選出した。調査時期：1回目は1年生 2012年5月、2回目は2年生前期 2013年8月、3回目は2年生後期 2014年2月の計3回のインタビュー調査をおこなった。

調査方法：インタビュー調査の所要時間は一人あたり、1回目・2回目は約30分間、3回目は約60分間であった。調査対象者には、事前に許可を得てICレコーダーを用いてインタビュー内容を録音した。

調査内容：A、Bともに、3回のインタビュー調査で、以下の①～③について質問した。

- ①「自分自身の成長について感じていること」
- ②「パフォーマンスコースのカリキュラムや活動内容について感じていること」

③「将来や今後の生活の展望」

2. インタビューによる結果

面接の逐語記録をもとに、パフォーマンスコースでの活動が生徒の成長にどのような影響を及ぼしているかについて、語られた内容を＜1年生＞、＜2年生前期＞、＜2年生後期＞の各時期でカテゴリーに分類しTable 1 に表した。

2. 1 面接で語られたエピソードのカテゴリー化

＜1年生＞では3つのカテゴリー、＜2年生前期＞では4つのカテゴリー、＜2年生後期＞では7つのカテゴリーが得られた。

＜1年生＞では、入学して約1ヵ月後の時期の語りであるが、【楽しさ・新鮮さ】【自分を出せる・明るくなった】【将来の展望】という3つのカテゴリーが得られている。パフォーマンスコースの活動について、「パフォーマンスコースでやるようなことは何もしてこなかったんで、すべてが新鮮」「すべて新しくて、やることは全部楽しい」といった語りが見られ、活動について楽しさや新鮮さを感じていることから、【楽しさ・新鮮さ】とカテゴリー化した。自分自身の成長については、「中学行けてなかった頃は引込み思案なところが少しあったと思うけれど、結構自分を出せるように少しずつなってきた」「表情をすごく作るのが豊かになったと言われて、すごく明るくなって、よく話すようになりました」など、すでに成長を感じており、特に自分自身を出すこと、またその結果明るくなったという変化を感じていることから、【自分を出せる・明るくなった】とカテゴリー化した。将来の展望や今後の生活についても、「少しずつ成長していくにつれて、いろいろな職業を知って、どうしようか迷っているところがあります」「身近な目標は3年間のうちに舞台で主役をとりたいたいという目標と、卒業してからはいろいろな世界に行けるような女優さんになりたいと思ってます」など、迷いや漠然としたイメージではあるものの将来への展望を持っていることから、【将来の展望】とカテゴリー化した。

＜2年生前期＞は、大きな公演や舞台をすでに経験し、1年間の活動を一通り経験したあとの時期の語りであり、【演じることの楽しさ】【自分を出せる・明るくなった】【自信がついた】【将来の展望】という4つのカテゴリーが得られた。

パフォーマンスコースの活動について、「演技が大好きです。セリフって一行しかないのにいろんな感じ方とかとれるなどが、すごい考えることができ楽しいのと、いろんな人になれるから楽しいです」と語

Table 1 インタビュー時期別のAとB「語りのカテゴリー」分類

	カテゴリー	具体例
1年生	楽しさ・新鮮さ	・パフォーマンスコースでやるようなことは何もしてこなかったの、すべてが新鮮。 ・すべて新しくして、やることは全部楽しい。
	自分を出せる・明るくなった	・中学行けてなかった頃は引っ込み思案なところが少しあったと思うけれど、結構自分を出せるように少しずつなってきた。 ・表情をすごく作るのが豊かになったと言われて、すごく明るくなって、よく話すようになりました。
	将来の展望	・少しずつ成長していくにつれて、いろいろな職業を知って、どうしようか迷っているところがあります。 ・身近な目標は3年間のうちに舞台で主役をとりたいたいという目標と、卒業してからはいろいろな世界に行けるような女優さんになりたいと思っています。
2年生前期	演じることの楽しさ	・演技が大好きです。セリフって一行しかないのいろんな感じ方とかとれるとか、すごい考えることができて楽しいのと、いろんな人になれるから楽しいです。
	自分を出せる・明るくなった	・中学校の頃は全然学校も行ってなくて、知らない人とか結構恐怖でしかなくて、ほとんど家から出なかった。1年間通して、いろんなことを体験してきた、他の人とか物に興味を持つというのが出てきて、人に接する恐怖心みたいのがだいぶなくなってきた。 ・自分のパフォーマンスに関しては、堂々と人の前で遠慮せずにやることできるようになった。 ・前はすごく人見知り。明るく、話が楽しく進めるようになりました。
	自信がついた	・自信がついたのがすごく大きかったらしくて、自信がついてから何にでも挑戦できるようになりました。 ・レッスン、授業をやっている、どんどん機会を与えていただいて、それをやっているとほめられたり、ダメ出しされてそこを改善していったり、そういうのをしていくうちにどんどん自分がうまくなっていて、最終的にはそこで輝けるようになっていったので、それがすごく自信につながっていったのかなって思っています。
	将来の展望	・舞台とか、いろんなことを通して、ダンスとか歌とか芝居とか殺陣とかすごい楽しくやらせてもらったんですけど、最初はそういう方面も面白そうだなって考えてたんですけど、舞台見に来てくれたときに、子どもたちの笑顔とか見てたら、そういう方面に興味持ってきて。 ・やっぱり演劇の仕事がしたいなと。あとは来年3年生で最後なので、絶対ずっとメインをとり続けたいなと。
2年生後期	演じることの楽しさ	・いろいろな人になれるし、やってて気持ちがいいし。見ている人が笑顔になってるから。
	演じることの難しさ	・どんどん自分の中で自信みたいなのを勝手になくしてって、悩んで、悩むだけ悩んで、がむしゃらにやるわけでもなく、ただ単に悩むという方向にいつちゃって、すごい後悔してるんですけど。 ・稽古してる最中にキャスト変更、それで違うメインになって、それがあって次も一応メインだったんですけど、いろいろ迷惑かかってたり。
	演じたあとの変化	・ヒロインの役を取ることができて、いろんなことが初めてだらけで最初はすごくびっくりして、本番終わってからすごいことしたんだって思い始めて、そこから強くなりましたね。いろいろ経験してから、こう生きていったらいいんだとか、明るくなったり、結構変わりました。 ・今回も壁がいつばいあって、大変だったんですよ。それと問題とかいろいろ起きて、自分では精一杯になっちゃったけど、弱音はかないで頑張ってきて、したらどんどん楽しくなってきた。 ・成長するには芝居が一番かな。自分で演じてるけど自分じゃないみたいな、そのセリフの中の人の感情だから、嫉妬してる気持ちってこんな感じなんだとか、憎たらしいときとか恨んでるときとかってこんな感じなんだとか、好きっていう気持ちってこんな感じなんだとか、すごい台本で演じてわかるものとかももらうものとかあるんで、それがすごい人生に役立つっていうか。
	自分を出せる・明るくなった	・根本的に人と接するのが増えた。もともと学校に行けてなくて、人と話すのができなかったの、気楽に話すことができたのが変わったなと思ってる。 ・パフォーマンス力も伸びたのかなって思うし、自分の気持ち的に今まで暗くなっちゃってたんですけど、明るくなった、気持ちが。 ・ネガティブ思考じゃなくなった、明るく明るくって思い始めてたら、ポジティブな感じになってきた。
	自信がついた	・今回の舞台は中学校の同級生をよんで、見に来てもらって、すごいほめてもらって。今の自分を見てもらいたくて。 ・自信がすごくついた。自分でも自信があるって思えるようになった。 ・自分とその支えてくれるみんなを信じて、逃げるっていう選択肢は考えなかった。 ・全然変わったと思いますね。中学の頃とかより全然。精神的にも肉体的にも。今回中学校のときとかのままだったら逃げ出したりとかあったらうし。
	視野の広がり	・公演も個人的には問題もいろいろあったりしたんですけど、支えてもらったり、最後までやりきって、すごい濃かったなって思います。公演が終わって、自分たちが3年になるのがそこにあるかと思うと、すごい周りを意識して、今までずっと自分の中だったから、いろんな人と話すようにして、なんか来年までとまっていけるようにとか、そういうこととか考えるようになりました。 ・今回すごいいろいろ考えることとかが多かったから、終わったあとはすごい周り見て考えるようになりましたね。 ・これからいろいろあるわけだから、周り見てかないっていうふうには、ちゃんと意識できるようになって、これからのこととか、どうしてこうとか、具体的にはまだわかんないですけど考えるようになりました。 ・周りを見ることを意識することを意識するっていうかそういうことができたかなって。 ・最近みんなとしゃべれるようになって、他のコースとも仲良くなって、すごく楽しくなって。 ・今回いろいろ人間関係は築けたなって。パフォの中でとか外でとか、いろいろ先生とかとも関係が築けたなって思いました。
	将来の展望	・今の輝きよりもっと輝くことと、役を取り続けること、コースをよくしていこう、守っていこうって思いました。 ・今のまま自由に楽しく、頑張らず、頑張るけど、でも自由に、自分なりにやってくって思っています。染まりたくないから周りに、自分らしい演技をして、自分らしく考えていきたいなと。

られ、複数の公演や舞台を経験して演技の楽しさを感じていることから、【演じることの楽しさ】とカテゴリー化した。自分自身の成長については、「1年間通して、いろんなことを体験してきて、他の人とか物に興味を持つというのが出てきて、人に接する恐怖心みたいなのがだいぶなくなってきた」「堂々と人の前で遠慮せずにやることができるようになった」「明るく、話が楽しく進めるようになりました」などの語りが見られ、人への恐怖心がなくなり、パフォーマンスを遠慮せずに行うことができるようになるなど自分を出せるようになってきていること、明るくなったことを実感していることから、＜1年生＞のときと同様に【自分を出せる・明るくなった】とカテゴリー化した。さらに、「自信がついたのがすごく大きかったらしくて、自信がついてから何にでも挑戦できるようになりました」「どんどん機会を与えていただいて、それをやっていたほめられたり、ダメ出し⁴⁾されてそこを改善していったり、そういうのをしていくうちにどんどん自分がうまくなっていて、最終的にはそこで輝けるようになっていったのかなって思ってます」など、パフォーマンスコースでの活動を通して自信がついたと感じていることから【自信がついた】とカテゴリー化した。また、将来の展望や今後の生活については、「舞台とか、いろんなことを通して、ダンスとか歌とか芝居とか殺陣とかすごい楽しくやらせてもらったんですけど、最初はそういう方面（舞台などの活動）も面白そうだなって考えてたんですけど、舞台見に来てくれたときに、子どもたちの笑顔とか見てたら、そういう方面（保育士）に興味持ってきて」「やっぱり演劇の仕事がしたいな」などの語りが見られ、パフォーマンスコースでの活動を通して将来の目標が変化していることや実感をもって将来について語られていることから、【将来の展望】としてカテゴリー化した。

＜2年生後期＞は、コースでの生活も2年目が終わろうとしている時期であり、最終学年である3年目を意識している時期でもあった。パフォーマンスコースでの活動についても成長についても、これまでより多くのエピソードが語られており、【演じることの楽しさ】【演じることの難しさ】【演じたあとの変化】【自分を出せる・明るくなった】【自信がついた】【視野の広がり】【将来の展望】という7つのカテゴリーが得られた。

パフォーマンスコースの活動については、「いろいろな人になれるし、やってて気持ちがいいし。見てい

る人が笑顔になってるから」など演じることによって感じられる楽しさが語られており、【演じることの楽しさ】とカテゴリー化した。また一方で、「どんどん自分の中で自信みたいなのを勝手になくしてって、悩んで、悩むだけ悩んで、がむしゃらにやるわけでもなく、ただ単に悩むっていう方向にいつちゃって、すごい後悔してるんですけど」「稽古してる最中にキャスト変更、それで違うメインになって、それがあって次も一応メインだったんですけど、いろいろ迷惑かかってたり」など、演じることに関する悩みや苦しさが語られたことから【演じることの難しさ】とカテゴリー化した。さらに、「本番終わってからすごいことしたんだって思い始めて、そこから強くなりましたね。いろいろ経験してから、こう生きていったらいいんだとか、明るくなったり、結構変わりました」「成長するには芝居が一番かな。…すごい台本で演じてわかるものとかもらうものとかあるんで、それがすごい人生に役立つっていうか」など、演じることによって自分自身に変化してきたこと、演じることを通して得たものがあることが語られており、【演じたあとの変化】とカテゴリー化した。自分自身の成長については、「根本的に人と接するのが増えた。もともと学校に行けてなくて、人と話すのができなかったの、気楽に話すことができたのが変わったなと思っていて」「自分の気持ち的に今まで暗くなっちゃってたんですけど、明るくなった、気持ち」「明るく明るくって思い始めてたら、ポジティブな感じになってきた」など、気楽に人と接することができるようになってきたこと、明るく前向きに気持ちに変化してきたことが語られていることから【自分を出せる・明るくなった】とカテゴリー化した。また、「自信がすごくついた。自分でも自信があるって思えるようになった」「全然変わったと思いますね。中学の頃とかより全然。精神的にも肉体的にも。今回中学校のときとかのままだったら逃げ出したりとかあったろうし」など、自分自身でも自信が持てたことを確信し、変化していることを実感していることから、【自信がついた】とカテゴリー化した。さらに、「公演が終わって、自分たちが3年になるのがそこにあるかと思うと、すごい周りを意識して、今までずっと自分の中だったから、いろんな人と話すようにして、なんか来年まとまっていけるようにとか、そういうこととか考えるようになりました」「今回すごいいろいろ考えることとかが多かったから、終わったあとはすごい周り見て考えるようになりましたね」「今回いろいろ人間関係は築けたなって。パ

パフォーマンスコースの中でとか外でとか、いろいろ先生とかとも関係が築けたなって思いました」など、公演や舞台の経験を通して、また最終学年である3年生になるという意識から、自分のことだけではなく周りを見ることを考えるようになったこと、そのことによって人間関係も広がっていることが語られていることから、【視野の広がり】とカテゴリー化した。また、将来の展望や今後の生活については、「今の輝きよりもっと輝くことと、役を取り続けること、コースをよくしていこう、守っていこうって思いました」「今のまま自由に楽しく、頑張らず、頑張るけど、でも自由に、自分なりにやってくって思っています。染まりたくないから周りに、自分らしい演技をして、自分らしく考えていきたいな」など、これまでの自分自身の経験からつながる目標やコース全体を意識した目標が語られていることから、【将来の展望】とカテゴリー化した。

2.2 パフォーマンス活動と生徒の成長との関連

インタビューの語りから、＜1年生＞＜2年生前期＞＜2年生後期＞の時期を通してのパフォーマンスコースでの活動と自分自身の成長の変化についてまとめたものがFigure 1である。パフォーマンスコースでの活動についても自分自身の成長についてもカテゴリーの数が増えており、より多様な内容が語られるようになっている。パフォーマンスコースでの活動については、＜1年生＞の活動を始めた当初に感じていたのは【楽しさ・新鮮さ】のみであったが、＜2年生前期＞＜2年生後期＞では演じることについての語りが多く見られるようになってくる。＜2年生前期＞では【演じることの楽しさ】が語られているが、＜2年生後期＞になると【演じることの楽しさ】に加えて、【演じることの難しさ】【演じたあとの変化】がさらに語られるようになる。インタビューの対象となった2名の生徒はいずれも公演でメイン級の役を演じており、そうした経験を通して演じることの楽しさだけではなく、難しさも感じている。そして、公演で役を演じ、その難しさに向き合い乗り越えていくことが【演じたあとの変化】をより感じることにつながっているものと考えられる。また、自分自身の成長についても、＜1年生＞では【自分を出せる・明るくなった】ことのみが語られているが、＜2年生前期＞には【自信がついた】という変化も加わり、＜2年生後期＞にはさらに【視野の広がり】という変化も加わっている。【自分を出せる・明るくなった】という変化は、＜1年生＞＜2年生前期＞＜2年生後期＞という

3つの時期を通して語られており、時期を経るごとに人との付き合いに積極的になり、明るくなっている自分を意識していることがうかがえる。一方で、【自信がついた】という変化はパフォーマンスコースでの活動の経験をより重ねていく＜2年生前期＞＜2年生後期＞に感じられるようになり、その内容も＜2年生の前期＞から＜2年生の後期＞にかけて自信の実感がより深まっていっていることがうかがえる。また、＜2年生後期＞は2年間の活動を経て3年生になることが意識され、自分自身のことだけではなく周囲やコース全体を意識することへと視野が広がっていることが語られている。それは同時にパフォーマンスコース以外の人間関係や先生との関係にも影響を与えており、パフォーマンスコースでの活動を通して、自分自身の変化がコース内の活動にとどまらず、学校生活全体に関わるような広い範囲で、実感されているものと考えられる。

次に、将来の展望や今後の生活については、＜1年生＞＜2年生前期＞＜2年生後期＞の3つの時期を通して【将来の展望】が語られているが、＜1年生＞の時期には迷いや漠然としたイメージであったものが、＜2年生前期＞にはパフォーマンス活動に影響を受けた内容となり、さらに＜2年生後期＞には自分自身の経験をふまえた具体的な目標へと変化しており、将来の展望もパフォーマンスコースでの活動の経験とともに変化しているものと考えられる。

＜1年生＞＜2年生前期＞＜2年生後期＞という3つの時点を通して、パフォーマンス活動の経験が増し、演じることに多くの意味（【演じることの楽しさ】【演じることの難しさ】【演じたあとの変化】）を感じるようになるとともに、自分自身の成長もより多くの側面（【自分を出せる・明るくなった】【自信がついた】【視野の広がり】）で感じ、将来の展望も変化している。パフォーマンス活動の経験により、自分を出せるようになること、明るくなること、自信をもてるようになるという変化を生じ、それらの変化がさらに新たなことに挑戦する意欲や将来への展望をより実感を伴ったものにしていてと考えられ、生徒のレジリエンスを高めることにもつながっているものと思われる。

IV. 研究2

1. 質問紙調査の方法

学年別・コース別（パフォーマンスコース・総合進学コース）および不登校経験のありなし別にレジリエ

ンス（精神的回復力）を高校1年生から3年生まで3回の調査をおこなった。

調査対象：通信制K高校1年生から3年生で、1回目はパフォーマンスコース112名、総合進学コース157名の計269名、2回目はパフォーマンスコース111名、総合進学コース143名の計254名、3回目はパフォーマンスコース88名、総合進学コース130名の計218名であった。

調査時期：1回目が2012年5月、2回目が2012年9月で3回目は2013年12月に質問紙調査法によってあらかじめ同意を得た生徒におこなった。

2. 【精神的回復力尺度】の内容

レジリエンスの測定には、小塩・中谷・金子・長峰(2002)の【精神的回復力尺度】を用いた。本尺度は、「色々なことにチャレンジするのが好きだ」や、「ものごとに対する興味や関心が強い方だ」などの【新奇性追求】（7項目）、「自分の感情をコントロールできるほうだ」や、「動揺しても、自分を落ち着かせることができる」などの【感情調整】（9項目）、「自分の未来にはきっといいことがあると思う」や、「将来の見通しは明るいと思う」などの【肯定的な未来志向】（5項目）の3つの下位因子の合計21項目からなり、評定者には「はい」（5点）から「いいえ」（1点）までの5件法で評定を求めた。

3. レジリエンスに対するパフォーマンス活動の影響

インタビュー対象者で、パフォーマンスコースにお

ける不登校経験があるAとBの、【新奇性追求】、【感情調整】、【肯定的な未来志向】をパフォーマンスコース・総合進学コースのコース別と不登校経験ありなし別の3回分の平均値の結果と比較した。平均値の比較は次のFigure 2～Figure 4の通りであった。

3.1 【新奇性追求】の結果

【新奇性追求】は、新たなことに常に挑戦したいと思う気持ちであり、困難な状況にありながらも耐える力とされている（小塩・中谷・金子・長峰，2002）。

【新奇性追求】得点に関して、パフォーマンスコースは不登校経験のありなしにかかわらず、総合進学コースよりも高い値であった。また、パフォーマンスコースでは、不登校経験がある生徒の方が、経験のない生徒よりも高い値であった。このようにレジリエンスの3要因のなかでも、【新奇性追求】については、パフォーマンスコースに在籍する不登校経験のある生徒の値が高かった。この【新奇性追求】得点が高かった理由として以下の解釈が考えられる。すなわちパフォーマンス活動では、生徒ら一人ひとりにとって、ダンス、歌、殺陣、芝居など、公演ごとに次々と新しい課題が与えられ、決められた期限内にそれらを達成することが求められる。このような、一人ひとりが自分の課題を達成するという経験を重ねていくことから「新しい課題に挑戦したい」という新奇性を追求するという気持ちが育成され強化されていくのではないかと考えられる。特に、パ

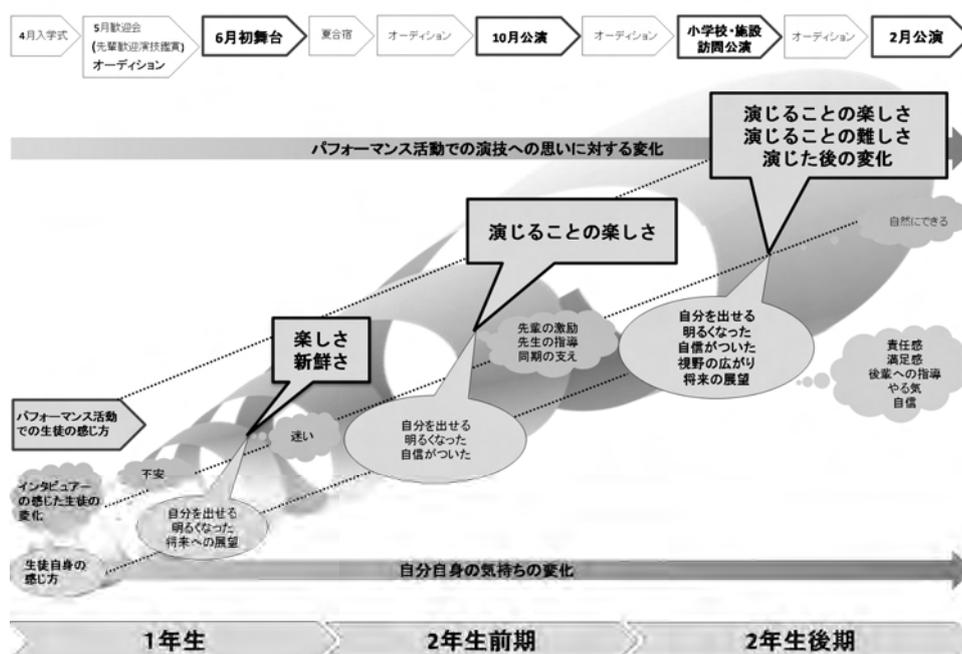


Figure 1 パフォーマンス活動での「演じること」と「自分の変化」関連図

パフォーマンス活動においては、「稽古」という場面をとおして、「失敗してもやり直せる」機会が保証されており、何度でも挑戦し、役柄での課題を解決していくなかで、失敗を恐れない気持ち、すなわちレジリエンスが育成、強化されていくと考えられる。

この【新奇性追求】に関して、Aの1・2回目の得点はあまり変化がないものの、いずれのコース別・不登校経験ありなし別の生徒の平均よりも高く、3回目の【新奇性追求】の得点は、他の生徒よりも高い値であった。Aは、入学後登校への不安を抱えていたものの、1回目1年生のインタビュー調査では「学校への恐怖心がなくなり、1日が楽しかったと思って下校できた」と語り、順調に登校を始めた。パフォーマンス活動に取り組み始めた2回目2年生前期では「様々な体験をし、興味関心を持てた」とし、3回目2年生後期のインタビュー調査では、「舞台公演に取り組みことができ、入学前にはありえなかった、昔の自分を思い出した」とパフォーマンス活動での新しい取り組みに対する意欲や喜びを語っている。

一方Bの【新奇性追求】得点の1回目は、コース別・不登校経験のありなし別の平均を上回った。2回目・3回目ともに、Bの【新奇性追求】は総合進学コースの生徒の平均値を上回った。Bは入学から2か月目の1回目1年生のインタビュー調査では、「表情が明るくなった」と評価されたことや「すべてが新鮮」と語った。その後体調不良が続き、2012年12月・2013年1月には、感染症の入院による出校停止があっ

た。この入院によって、公演のメイン級の役を降りざるを得ない結果となり、新しいことに挑戦していく気持ちが低下する原因になったとも考えられる。

3.2 【感情調整】の結果

【感情調整】は、感情に関連する心理のプロセスを、開始、維持、制御し、深刻な出来事で感情が混乱しても感情をコントロールし、混乱を収めることができる力とされている（小塩，2011）。【感情調整】の平均得点は、不登校経験ありの生徒の方が、不登校経験なしの生徒よりも低い値であった。またパフォーマンスコースは不登校経験のありなしにかかわらず、総合進学コースよりも平均値が高い値であった。

AとBの【感情調整】は1回目の調査では、コース別・不登校経験ありなし別の平均値のいずれよりも低かった。2回目は、Aは1回目とあまり変化がみられなかった。Bの2回目は1回目よりも伸びており、コース別・不登校経験ありなし別の平均値を上回ったが、3回目は2回目とあまり変わらなかった。

Aにおいては、3回目は得点が向上している。前述の【新奇性追求】と後述の【肯定的な未来志向】の伸びと共に着目したい点である。A、Bともに、不登校経験が長く不登校中は、交通機関の利用や、他者との対面による会話が困難であったことがインタビュー調査から明らかになっており、パフォーマンスコース入学後、徐々にではあるが、【感情調整】が向上してきている。

またA、Bともに、公演ではメイン級の配役を与え

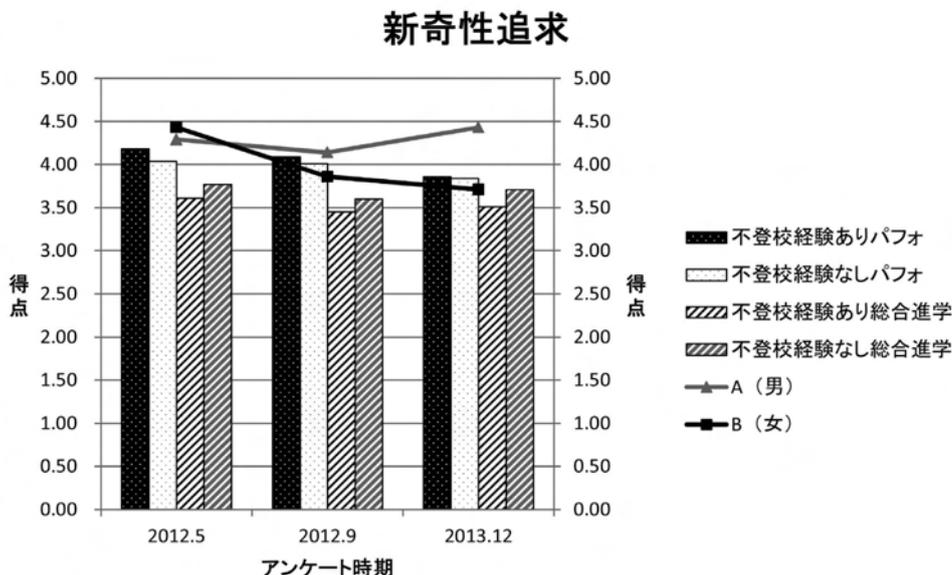


Figure 2 「新奇性追求」平均得点時期別コース別不登校経験別比較

られている。パフォーマンスコースの生徒は、役柄を演じることで感情を表現として伝える力が生まれ、演技を繰り返すことを通して、自らの【感情調整】にも影響している可能性が考えられる。A, Bは3回目2年生後期のインタビュー調査に対人への恐怖や緊張がなくなったことや、他のコースの生徒との友好関係の構築や、先生との関係がパフォーマンスコースを問わず広がったことを語っている。

3.3 【肯定的な未来志向】の結果

【肯定的な未来志向】は、将来の夢や目標をもち、その実現にむけ計画を立てることで、不安や脅威をもたらす状況下におかれても、前向きな展望を持ち続けることができる力とされている(小塩, 2011)。筆者の先の調査から不登校経験ありの生徒は、不登校経験なしの生徒に比べ【肯定的な未来志向】得点が低いことが示された(大橋, 2014)。これについては、不登校を経験したことにより、前向きな展望を持ちにくいということを示していると考えられる。しかし、パフォーマンスコースの生徒は不登校経験のありなしに関わらず、総合進学コースの生徒と比較すると、【肯定的な未来志向】得点が高いことが示された。パフォーマンスコースでは、頑張っ身につけたスキルを、定期的に公演で披露することにより、自分自身のスキルで十分に達成できた点や、補うべき点がフィードバックされ、目標がクリアになっていると考えられる。その振り返りの中から、さらに次のスキルアップに向けてあらたな夢や目標ができる。このような積み重ねが、前向きな展望を持ち続ける力や、実現にむけ

た具体的な計画を立てる力につながると考えられる。

Aは、長期の不登校生活により、高校進学時にはかなりの不安を抱えていたことが1回目1年生のインタビュー調査からわかっている。しかし入学直後間もなく、学校への登校は楽しくなったと気持ちが変わっている。しかしながら2回目2年生前期の調査時での「肯定的未来志向」得点は著しく低下している。インタビュー調査によると、Aはパフォーマンスコースの活動の中で自分の演技や能力と、自分の理想との乖離からくる不安や疑問を述べており、このことが【肯定的な未来志向】の得点を低下させた理由として考えられる。しかし、このような現実の自分と理想の自分との乖離による一時的なレジリエンスの低下は必ずしも否定的な意味を持つものではない。すなわち現実の自己と理想の自己の乖離とは、「こうありたい」という目標とする自己像が生じてきたことによるものであり、また現実の自己像の低下も自分自身をより客観的にとらえなおすことができ始めた論拠とも言えよう。事実、3回目2年生後期の調査ではAの【肯定的な未来志向】得点は急激な回復を示す。すなわち、精神的回復力がAにおいて機能したことを示すものであると考えられる。インタビュー内容から、この時の状況をみてみると、現実と理想との乖離に悩みながらも、公演を重ねそれをやり遂げたことによって、自信へとつながり演じることの楽しさを体感したと語り、「後輩も含め全体を見通す余裕が出た」と述べている。これらの発言はすなわち、Aにとって、パフォーマンスコースにおける活動がレジリエンスを高めるように機

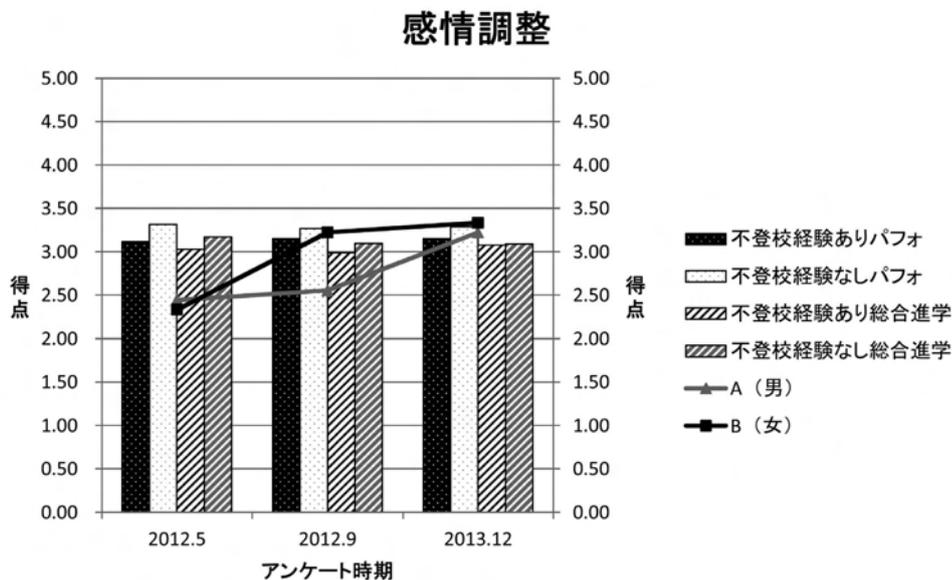


Figure 3 「感情調整」平均得点時期別コース別不登校経験別比較

能したことを示唆するものと言えよう。

他方Bの、【肯定的な未来志向】の1回目の平均得点はどちらのコース、また不登校経験のありなしの生徒よりも高得点を示した。2回目は少し下がったもののほぼ横ばいであった。3回目は、総合進学コースの不登校経験のありなしの生徒よりも高かった。2012年の入院による、公演欠席が【新奇性追求】や【肯定的な未来志向】の低下につながった可能性が高い。3回目のインタビュー調査では、二人ともが今後、先輩を越えて頑張っていきたいと語っている。

4. コース別および不登校経験ありなし別による学校適応の検討

本研究では、学校適応の判断の指標として、出席簿から出席率を算出した。この指標を使用する理由は、不登校とは学校に登校しない現象であり、まず学校に登校し出席となることが学校適応において欠かせない要件となるためである。それゆえ今回、K高校において、毎朝のホームルームから授業に出席し、出席簿で確認できた生徒を出席扱いとした。

調査対象：高校1年生から3年生のパフォーマンスコース及び総合進学コースの生徒。内訳は、パフォーマンスコースの生徒が2012年度、124名、2013年度、136名の合計260名であった。総合進学コースの生徒が2012年度、177名、2013年度、155名で合計332名であった。不登校経験の割合は、不登校経験ありの生徒が2012年度、パフォーマンスコースは44.4%、総合進学コースは60.5%であった。2013年度、パフォーマ

ンスコースは40.4%、総合進学コースは53.5%であった。

調査期間：2012年4月～2014年3月までの2年間であった。

手続き：パフォーマンスコースと総合進学コース（1年生～3年生）の毎月の出席率の集計（2年間）を行いその結果を比較した。

5. K高校における学校適応の指標とした出席状況の結果

不登校経験なし群と不登校経験あり群を比較すると、不登校経験なし群の出席率が高いことが示された。コース別に比較すると、パフォーマンスコースの生徒は、不登校経験ありなしにかかわらず、総合進学コースの生徒よりも出席率は高かった。さらに、パフォーマンスコースの不登校経験のある生徒については、総合進学コースの不登校経験のない生徒よりも出席率が高いこと示された。このことからパフォーマンス活動が不登校経験のある生徒の学校適応に関連があるのではないかと考えられる。AとBの出席率をコース別・不登校経験ありなし別と比較した結果は次のFigure 5の通りであった。

Aの出席率は、中学校時代に長期の不登校経験があるにもかかわらず、2年間100%出席を維持している。1回目のインタビューでAは、「中学校時代、1年生の最初は学校に通っていたが、ゴールデンウィーク明けから中学3年生まで不登校となった」、Bは、「中学校時代は、ほとんど学校に通っていなかった」とし、

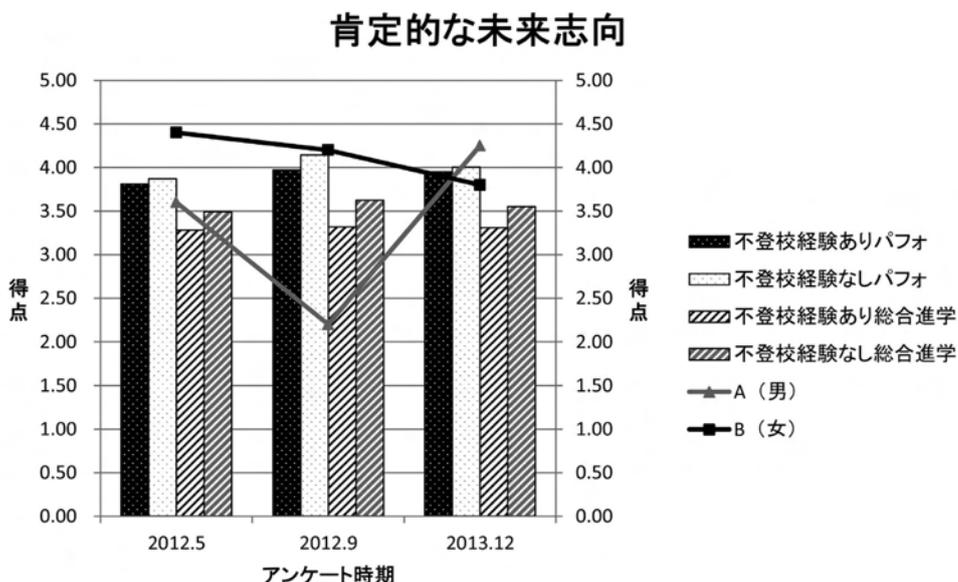


Figure 4 「肯定的な未来志向」平均得点時期別コース別不登校経験別比較

Bは、高校1年次は時々休んでしまったが、2年生では100%出席をしようと決めたと言語り2年生では100%の出席率を維持している。いずれも高校進学時には、通学できるか不安を抱えていた。しかし、オープンキャンパス時、パフォーマンスコースの先輩の輝きを見ていずれも進学を決めている。通学し始めて、「安心して学校に通えるようになった」と述べ、いずれもパフォーマンスコースでの活動を「新鮮、楽しい」と感じたと言語っている。2回目のインタビュー調査では、1年間の活動の経験から2年目は落ち着いて活動が出来るようになってきていること、後輩への指導を意識していることを述べ、自分が休むことで全員に迷惑がかかるので休めないことや、活動への参加が楽しみで休みたいと言語った。いずれも学校適応の指標とした出席率が、中学校時代と比較すると著しく改善された。

V. 総合考察

パフォーマンスコースには、大小合わせて発表の場が年間15回あり、生徒にとっては、毎回どの公演も新たな挑戦の場や厳しい試練の場となる。また、パフォーマンスコースでは、日常の活動や公演を支える教員の指導は、生徒の不登校経験について考慮しないことを原則としている。Aは、教員からの指導について「多くの機会を与えられ、それをほめられたり、ダメ出しされ、それを改善していくうちにとても演ずることがとても上手になり、最終的にはそこで輝く自分を実感し、それが自信につながった」と語った。Bは、「自分の性格もあって、ダメなことはダメとバシバシ全部言われた、くそっと思ったり、イラッと思ったりするけれど、その実感が大切だとわかった」と述

べている。役柄や役割に先生方は厳しい指導をするが、自分自身の出来ていないところを理解し、改善することで、上手に演じられるようになり、それが自信につながることを示された。ダメ出しは自分のパフォーマンスを磨くためのものだと感謝して受け止めることができていることがインタビューで明らかになった。さらに公演への参加は、自分自身の存在感や自分の持つ力に自信を感じることが出来る機会になっている。たとえメインの配役として選ばれなくても、アンサンブル（助演者）や、舞台・音響・衣装・プログラム・ポスターの作成等、様々な場面で自分が必要とされる場や力が発揮できる場がある。またこれらの公演は、一人欠けても成り立たないという共同作業である。そのために生徒は責任を感じ、「休まない」「遅刻・早退しない」努力をするようになったと、AやBは述べている。公演に向けてのプロセスは、自然と生徒同士を支えあう機会になると考えられる。「舞台は中学校の同級生をよんで、見に来てもらって、すごいほめてもらって。今の自分を見てもらいたくて」「自信がすごくなった。自分でも自信があるって思えるようになった」「自分とその支えてくれるみんなを信じて、逃げるっていう選択肢は考えなかった」「全然変わったと思いますね。中学の頃とかより全然。精神的にも肉体的にも。今回中学校のときとかのままだったら逃げ出したりとかあったろうし」と、2年生の後期のインタビュー調査で語っている。小塩（2011）は、レジリエンスを「折れない心」と表現し困難な局面や悲惨な状況に置かれても、しなやかに回復する過程の概念だとし、心の柔軟さをもたらず精神的回復力は「折れない心」だと考えた。このように、不登校経験という困難な状況から、パフォーマンス活動をとおして、精神的回復をとげ、「折れない心」を育成・強

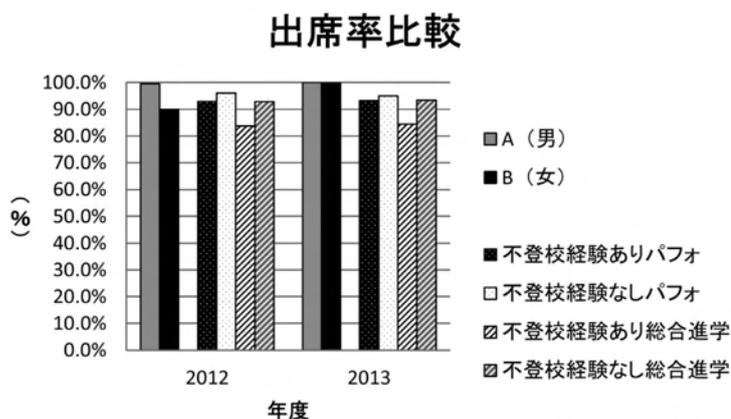


Figure 5 年度別コース別不登校経験別平均出席率比較

化され、学校に休まず通学できるようになった。現在、AとBは、高校3年生の進路選択の時期にあたり、様々に自分自身の未来を開拓している。伊藤（2012）がK高校を対象に行った、「不登校の過去・現在・未来」に関する調査（報告）からも、パフォーマンスコースの生徒は、将来に夢を持ち高校での勉強にやりがいを感じている者が多いと述べている。

以上のようなインタビューやレジリエンス調査から、本研究では、身体活動を中心に据えた様々なパフォーマンス活動とレジリエンス（精神的回復力）との関連を、不登校回復過程への一つのアプローチとして検討した。パフォーマンスコースの活動は、厳しい試練や責任感への重圧など、生徒の負担は大きいと考えられるが、結果として、これらの活動から得られる自信や、さらなる新しい活動への欲求が自然と生まれる場になっている。困難な状況にあっても、これらパフォーマンスコースの活動により適応力が強化され、精神的回復力つまりレジリエンスが育成されたと考えられる。

VI. 今後の課題

パフォーマンスコースの教員の指導（そのタイミングと質や時期など）やパフォーマンス活動の量がレジリエンスに影響を与えているのか、さらには、配役、役割分担、出演回数などによってレジリエンスやひいては学校適応に違いが出るのか、個人の心の変化に焦点づけて明らかにする必要があると考えられる。

注記

- 1) 演劇活動の通称。
- 2) インプロとは、インプロビゼーションの略称。俳優の演劇活動トレーニングのメソッドとして考案されたもの。役者に必要な演技力を高めるために開発された様々なゲームやフォーム。アイデアを生かし、台本などの決まりごとはなく、役や関係性を築き上げる即興劇。
- 3) 殺陣とは、演劇・映画などで行う、乱闘・捕り物・斬り合いなどの演技。パフォーマンスコースでは、木剣で稽古をし、剣の型を学び、複数名で剣（竹光）を使い斬り合う手付を学ぶ。
- 4) ダメ出しとは、芝居の世界で、主に演出家が俳優・スタッフに対し、修正や訂正を促すために行う要請や注意のこと。

引用文献

- Flach, F.F. 1997 Resilience: The power to bounce back when the going gets tough! New York: Hatherleigh Press.
- 伊藤美奈子 2009 不登校 その心もようと支援の実際 金子書房
- 伊藤美奈子 2012 K高校を対象とした「不登校の過去・現在・未来」に関する調査（報告）公益財団法人 こども教育支援財団会報 特別号
- 国立教育政策研究所 2013 公立高等学校の中途退学発生プロセスについての調査研究（中間報告）
- 三池輝久（編）2009 不登校外来 診断と治療社
- 文部省 1993 高等学校中途退学問題への対応について
- 文部科学省 2003 不登校への対応について
- 文部科学省 2013 高等学校教育部会（第19回）資料 2-1 定時制・通信制課程について
- 文部科学省 2014 学校基本調査
- 内閣府 2007 ユースアドバイザー養成プログラム（改訂版）
- 内閣府 2011 若者の意識に関する調査（ひきこもりに関する実態調査）
- 内閣府 2013 子ども・若者白書
- 大橋節子 2013 不登校経験のある高校生のレジリエンスに対するパフォーマンス活動の効果と学校適応への影響－K高校パフォーマンスコースの実践から－ 甲南女子大学大学院論集, 12, 17-27
- 小塩真司・中谷泰之・金子一史・長峰伸治 2002 ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性－精神的回復力尺度の作成－ カウンセリング研究, 35, 57-65
- 小塩真司 2011 レジリエンス研究からみる「折れない心」 深谷和子（編集代表）・新井邦二郎・沢崎達夫・諸富祥彦・大数見仁（編）児童心理 金子書房 pp.62-68
- Rutter, M. 1985 Resilience in the face of adversity: Protective factors and resilience to psychiatric disorder. *British Journal of Psychiatry*, 147, 598-611
- 田中英高 2009 起立性調節障害の子どもの正しい理解と対応 中央法規出版
- 財団法人全国高等学校定時制通信制教育振興会 2012 文部科学省平成23年度「高等学校教育の推進に関する取組の調査研究」委託調査研究報告書 高等学校定時制課程・通信制課程の在り方に関する調査研究